

落語化する「素人洋食」

— 山田美妙原作から三遊亭円遊口演へ —

大橋 崇行

一 はじめに

落語「素人洋食」は、明治三二年一〇月一日に鹿鳴館で開催された日本演芸協会の演習において、初代三遊亭円遊によって初演された噺だと考えられる。

その後、速記雑誌『百花園』第四〇号（明治三三・一二・二〇）、および第四一号（明治二四・一・五）に、今村次郎による速記が掲載された。また、磯部甲陽堂の『円遊新落語集』（明治四〇）と『名人落語大全』（明治四五）、三芳屋書店と松陽堂書店が刊行した『故人円遊落語集』（明治四四）に収められたほか、丸亀書房から出た尚武軒主人編『落語五人全集』（大正一四）で「素人の洋食」という演題で収められている。

これらはすべて、初代円遊によって演じられたものとされている。

一方、富文館書店の『名人揃落語集』（第二集、昭和一三）にも、演者の記載はないものの、「素人洋食」の本文が見られる。初代の円遊以外にこの噺を高座にかけたという記録は確認できておらず、それ以外の本文との関係から考えれば、このテキストも円遊が演じたものを活字化したと考えると良いと思われる。

落語化する「素人洋食」

二 初代三遊亭円遊について

『三遊亭／円遊滑稽落語集』（明治四三）に収められた談話「円遊身上噺」や、円遊が死去した直後に『読売新聞』に出された「故円遊の逸話」（明治四〇・一一・二七）、「三遊亭円遊死す」（同）、同日の『東京朝日新聞』の「三遊亭円遊死す／一名物を失ふ」（同）によれば、初代三遊亭円遊（嘉永五―明治四〇）は本名を竹内金太郎といい、小石川小日向の紺屋「藤屋」に生まれたとされる。

幼い頃から落語に親しんで目白の目白亭や服部坂の服部亭によく通っており、日本橋本石町にある紺屋「山城屋」で奉公をした。その後、当初は三遊亭円朝に弟子入りを志願したものの断られ、慶應四年に二代目五明楼玉輔に入門して「しう雀」を名乗ったのち、明治三年に玉輔が一度廃業をしたときに円朝の門に移って名を円遊と改めている。それ以前にも円遊を名乗った噺家は複数いたらしいことから、暉峻康隆ほか編『明治大正落語集成』（二巻、昭和五五）に収められた『百花園』所載の速記を底本とする「素人洋食」の本文には、「三代目三遊亭円遊口演」と記載されている。しかし、円朝の死後に三遊派の領袖として明治後期の落語界を背負う大看板になったことで、現在では彼を以て初代の円遊みなすことが一般的になっている。

落語化する「素人洋食」

特に、「捨ててこ、捨ててこ」と言いながら着物の裾を捲くって踊る「ステテコ踊り」で知られて「ステテコの円遊」と呼ばれた。落語「死神」に由来する「テケレツツノバ」をネタとして「金堀りの談志」と呼ばれた四代目立川談志、「ヘラヘラ節」で知られる初代三遊亭萬橘、「ラッパの円太郎」こと四代目橋屋円太郎とともに、明治後期において人気を博していた。

また、大きな鼻で知られて「鼻の円遊」とも通称されていた。これらの点については、円遊自身による回想のほかにも、多くの評価が残っている。

「エ、円遊の鼻は御覧の通りはなは大きい、然し人間万事はなの中の、兎角世間ははなに酒、はなかしこ、はなかしこ……」などと下らないことを言つて誤魔化して居てもお客様は喜びになる。

〔円遊身上噺〕、『三遊亭円遊滑稽落語集』、明治四三

円朝歿後偶天才円遊を産む遊は小石川紺屋の若旦那也一度び高座に出づるや解願の奇術を恣にし一派の頭領と成る其成功は彼の鼻の力のみには非ず浅草三筋町にステ、コ庫を建て余生閑也笑を売つて財を作る可笑しき商売也

〔湯朝観明編『百字文百人評』、明治三八〕

円遊の噺の特徴は、滑稽噺を得意とし、それ以前から伝わっていた落語を当時としての現代である明治期の習俗に合わせて「改良」したことにあるとされる。この点については、円遊がふだんから周囲に話していたこととして、記事が残っている。

落語は大体話の極つたもので誰が話をしても同じ様になる。之れを新しく聴せる事は困難だ。けれど常に社会の出来事に注意を払ひ仮令ば観兵式があるとすれば其模様を話の間に挟み、電車焼打事件が起れば夫れを調合して往けば聴衆からワット落ちが来て非常な喝采を博し何となく古い話も新しく聞れるから平生社会の

出来事には油断なく注意するが我々仲間の秘訣である。

〔故円遊の逸話〕「平生の心懸」、『読売新聞』、

明治四〇・一一・二七

また、「得意の落語は自作の当世風滑稽物」(『三遊亭円遊死す／一名物を失ふ』、『東京朝日新聞』前掲)と評されたように新作落語の作者としても知られ、現在でもしばしば高座にかけられる噺として「野ざらし」があるほか、「王子の暫間」「地獄旅行」「素人力」「成田小僧」「梅見の葉缶」といった噺を次々と作つたとされている。

三 「素人洋食」の評価と原作の存在

しかし、こうした円遊についての評価の中でも、「素人洋食」については、東大落語会編『増補／落語事典』(昭和四四)や瀧口雅仁『古典・新作落語事典』(平成二八)に記載がない。しかし、先述のように陣崎康隆ほか編『明治大正落語集成』(二巻)に所収されており、興津要が解題を記している。短い文章であるため、全文を引用する。

徳川幕府瓦解後、生活に窮した士族が、慣れない商法に手を出して四苦八苦する姿に取材した落語「素人汁粉」「素人鰻」などが、この噺の源流であろう。とくに、料理人が不在のためにパンばかり出す場面は、俗に「鰻屋」と呼ばれる噺で、職人がいなくなったために、酒と香の物ばかり出すくだりの焼き直しと思われる。改作とは云つても、明治五年に丸の内馬場先門(のちに築地)に精養軒が開店され、同九年に上野支店もできたあたりから洋食店が流行しはじめ、同十九年には、築地精養軒でテーブルマナーを学ぶ洋食会が開催されるなどして洋食が普及しつつあった風潮を利用した手腕はみごとであり、また、日本国内では、明治七年の試作につづいて、同二十四年の製造と、まだ庶民に定着しなかつたバターを落ちに使った新鮮な感覚も、時勢に敏感な円遊らしい

アイデアだった。^(註)

ここで興津は、三つの点について述べている。第一に、「円遊らしいアイデアだった」というように、「素人洋食」が円遊の作だと判断していることである。第二に、必々舎馬宥(序)『時勢漸項目』(安永六)の「俄旅」を基にしたといわれる「鰻屋」や、米沢彦八「軽口大矢数」(安永二)の「かば焼」から派生したとされる「素人鰻」、三遊亭円朝作とされている「素人汁粉」(「士族の商法」)を土台として作られた漸であることが挙げられる。そして第三に、士族が明治期になって日本に入ってきた新しい食べ物である「洋食」作りに手を出すという「素人洋食」の趣向に「新鮮な感覚」があり、その「手腕はみごと」だという点である。

先述のように、円遊は新作落語や、古典落語を明治の習俗を取り入れた漸に移し替えることを得意としていた。このことから、「素人洋食」もそうした漸の一つとして認識され、それが興津要による評価へとつながったものであろう。

しかし、日本演芸協会における初演の前日に、会の開催予定を報じた明治二年一〇月一二日の『読売新聞』記事には、次のように記されている。

◎日本演芸協会演習 演芸矯風会と称せしを今の名に改めてより一層規模を拡張し組織を整理したる同会ハ会規に随ひ来る十三日午後十二時半より鹿鳴館に於て諸芸演習を催す由当日の番組は第一 素人洋食(山田美妙齋作)三遊亭円遊

『読売新聞』明治二二・一〇・一二

これによれば、「素人洋食」は山田美妙の原作であり、それを円遊が高座にかけたことになる。この場合、日本演芸協会の演習が開催された翌日の一〇月一四日に『読売新聞』に掲載された、山田美妙「素人洋食」が、その原作に当たると考えられる。

この作品は『山田美妙集 第二巻』に収められており、山田有策は

落語化する「素人洋食」

「落語の古典「素人鰻」にヒントを得たらしいが、ユーモアが洗練されていないためか、折角の口語体も効力を欠く結果となっている。」と述べている。^(註)『山田美妙集』の第二巻は「小説(二)」と題されていることから、「素人洋食」がここでは落語の原作としてではなく、「小説」という扱いで収められていることになる。したがってこのでの評価は、あくまで「小説」として読んだ場合に生じたものということになるであろう。

しかし、美妙の「素人洋食」を、落語の原作が『読売新聞』に掲載されたものと考えた場合には、評価のあり方も違ってくるように思われる。そこで本論では、『読売新聞』に掲載された美妙による原作が、落語として演じられるに当たってどのように作り替えられたのかという視点から見えていきたい。このことを通じて、明治期の落語がどのような作られていたのか、それが明治期において物語が編成されるべきどのような問題と関わっているのかについて、考察を進めていくこととする。

四 二つの「素人洋食」

円遊の速記はそのときでマクラの内容が大きく変わるため、本論では「素人洋食」の本題のほうを問題としたい。その概要は、以下の通りである。

古風な考えの持ち主で文明開化の世をあまりに嫌っていることで長屋の人たちからも疎まれていた金満家の今田旧平だったが、江戸の三百年祭が済んだことをきっかけに芝公園で運動し、勤工場を訪れ、牛肉を食べた後に珍しく人力車で帰宅したところ、すっかり開化に絆されて、いきなり洋食屋を始めると言いだしてしまう。しかもわずか一錢五厘で買ってきた『西洋料理煮方法』という怪しげな本を読んで、洋食はもうわかったというのだ。そこで、開業をする前に自分を馬鹿

落語化する「素人洋食」

にしていた長屋の者たちを呼んで、料理を振る舞うという。

しかし長屋の人たちは誰もやって来ない。すると今田旧作が、そこまで自分を馬鹿にするなら今まで貸した金をすぐ持ってこいというので、長屋の人たちは戦々恐々としながらやってくる。けれども、一人だけ洋食の作り方を知っているような吉兵衛はどこかへ行ってしまう、客たちには行灯用の魚油を使って作った臭いスープが出たのは、パンばかりが出てくる。やがて、油に火が入って台所の神棚から出ている幣に火が付いたり、スプーンがほしいと言われたのをスッポンと勘違いして生きたまま出したりと大騒ぎ。ようやく帰ってきた吉兵衛は、どうしてパンがこんなに出るのかと訊ねられ、「パンの多い訳で、長屋の人が一同バタにされたんだ」と答えるのがサゲとなる。

もちろんあくまで速記による記録であるため、実際に円遊が高座にかけたものとは、必ずしも同じものとは言えない。しかし、明治四〇年代から大正期にかけて出たテキストと『百花園』に掲載の速記とを較べると、基本的にはこの内容が演じられていたことがわかる。

これに対し、山田美妙による原作は、基本的な筋は同じであるものの、具体的な描写や一部の内容が異なっている。

まず、洋食屋を企てるのが士族の今田旧平ではなく、「近頃非職になつた官員さま」となっている。この官員は二回しか洋食を食べたことがなかったが、夜店で二銭五厘で売っている本を頼りに、自ら料理を出そうと考える。しかし、買ってきた本を読んでも「ライスカレー」「チッケン」「カツレツ」といった言葉の意味がわからず、とりあえず「ソップ」の次に「アイスクリーム」「珈琲」を出そうと決めたところでちょうど数人の来客があり、ためしにもてなしてみようとするものの、水に漬けておいた肉は腐っていて臭いがたまらない。次に出したはずのアイスクリームに、客は目を白黒させてしまう。なんと、同じように黄色い塊で、牛乳から作ったものであったために、アイスクリームと間違えてバターを出していたのだ。そこで客が、「人

をバタにした話しだなア」とコメントするところがサゲになっている。

双方の内容を読み比べると、新しい食べ物である「洋食」作りに手を出すという趣向、バターをサゲに持つてくるという発想という、興津要が「時勢に敏感な円遊らしいアイデア」として円遊の功績と位置づけていた要素は、すべて円遊のものではなく、美妙による発案だったことがわかる。しかも、美妙の原作はバターとアイスクリームとを間違えるという内容が「人をバタにした話」というサゲにつながっているものの、円遊が演じたものは今田旧平を馬鹿にしていたはずの長屋の人たちが逆に「馬鹿にされる」とこと、パンに塗るはずの「バター」とを掛けただけの駄洒落となっている。その意味で、興津要による評価は、明らかにテキストの実態とは異なるものだと指摘することができ。したがって、円遊による「素人洋食」については、興津要が示した枠組みとは異なるところで考えていく必要がある。

五 長屋噺への変更

それでは、円遊による口演は、どのように位置づければ良いのだろうか。このときに注目したいのは、美妙の原作から、円遊がどのように落語としての要素を組み込んでいったのかという点である。

第一に、「近頃非職になつた官員さま」だった主人公が今田旧平に改められ、「素人汁粉」（「士族の商法」）や「素人鰻」と同じ話型になっている点であろう。これに加え、円遊による口演では、長屋の大家（家主）とその住人たち（店子）による滑稽なやりとりという「出来心」や「お化け長屋」など江戸期以来の長屋噺に典型的に見られる様式の一つに原作を落とし込んだ上で、より滑稽な噺へと巧みに作り替えている。

甲「夫ぢやア往て来るよ

女「お前さん気を付てお出なさいよ始終那所の事を悪く言てるか

ら何かモルヒネか何か這入てる物を食させられるかも知れないから用心をして……

甲「乃公も最う覚悟して居る、何か消毒薬があるなら持つて往かう……庄家さん夫では参る事にいたしました

差「ヤイ大きに御気の毒だが往てお呉れ旦那が自分で洋食を拵えるんださうだ

甲「エー最う命を的に懸て参つたんで

(三遊亭円遊口演・今村次郎筆記「素人洋食」、『百花園』第四一号、明治二四・一・五)

今田旧作が作った洋食を食べに行くことになり、長屋の住人(甲)とその妻(女)、そして店子たちと今田旧作とのあいだに立つ差配人(庄家)たちがやりとりする場面である。

大家に呼び出されて、店子たちが家賃の催促ではないかと恐れるという噺には「黄金の大黒」「長屋の花見」などがあるが、ここでは家賃の催促ということからさらに踏み込んで、たかだか洋食を食べにくいというイベントのために、店子たちが悲壮感たっぷりに「命を的に懸け」る覚悟を持つ様子を語る。引用部分の直後では、長屋に住む老婆が「私はモ一六十三歳二ヶ月で本卦返りも済みましたから惜しからぬ命で、ア、是が別れになる事で御座いませう南無阿弥陀仏」と、どう考えても「惜しからぬ命」だとは微塵も思っていない様子で、念仏を唱えはじめる。こうした店子たちの反応から、噺の滑稽さを生み出しているのである。

このくだりは、美妙の原作では「夕方の六時頃にハ二三人の来客がそろく詰めかけて参りました」と、事情を知らない客たちが店に入ってきてしまうという内容になっている。また、「素人鰻」や「素人汁粉」(「土族の商法」)にもこうした場面はなく、明らかに円遊が付け加えた場面だとわかる。

このように円遊の口演では、美妙の原作では稀薄だった既存の落語

落語化する「素人洋食」

との関係が、より強固に加えられている。このことは大衆芸能において、観客にとって既知の枠組みを取り入れることが作品を受容する上で欠かせない要素であることから、それをどのように取り入れるかというところで行われた操作だと考えることもできる。一方で、こうした変更を行うことで、「素人洋食」は美妙の原作よりもずっと滑稽噺として洗練された内容になっている。

六 「素人汁粉」(「土族の商法」)「素人鰻」との関係

もう一つ円遊の口演で特徴的なのは、本来であれば洋食を作ることができたはずの吉兵衛が、席を外してしまうという場面の存在である。

女「イ、エ洋食の拵へ方なんで、洋食を心得てる吉兵衛さんが何処かへ行って仕舞たんで旦那様が困つて居るんですよと水が火に這入て荒神様の御幣に火が付て台処で大騒ぎ……

乙「然うで御座いますか、ヘエー油の中へ水が這入て夫へ火が移つて、危険げすねエ、オヤ又パンが来たパン斗り出るが妙でげすなア

丙「私の皿の上に載けて置た、アノ何と云ふ者だか、ア、スプンとかフオクとか云ふものがありませぬ姐さん恐れ入りましたがスプンといふものを何か遣して下さいませんか

女「畏こまりました只今……旦那様がお客様がスプンを買って遣せと云ひます……

旧「スツボン、エ、吉兵衛が早く帰て来て呉れ、ば宜いんだが何処へ行つてんだなア何しろスツボンと云ふものは本にも見えなかつたが大方洋食の中に鰻があるんだらう、早速夫ぢやア柳原が宜いから鰻の大きいのを五疋ばかり買つて来なさい

(三遊亭円遊口演・今村次郎筆記「素人洋食」、『百花園』第四一号、明治二四・一・五)

落語化する「素人洋食」

洋食の作り方をただ一人だけ知っている吉兵衛がいなくなってしまうことが、今田旧平が台所で大騒ぎする要因であり、また、下女が「スポン」を「スツボン」と発音したこと、から、「鼈」を客席に生きたまま次々と投げ入れて大騒ぎになる要因になっている。

これに対し美妙の原作では、「主人ハ台所で一人で目をまはすほど急がし居ます」とだけ書かれており、そもそも吉兵衛がいなくなるというくだりは存在しない。

このとき、本来なら作れるはずの者がいなくなってしまうという円遊が加えた要素は、「鰻屋」との関係が想起される部分であろう。

しかし、「鰻屋」については明治期の速記が管見では確認できず、大正期に入ってから高座にかけられた三升亭小勝による口演の記録が残されているのみである。

主「ヘエ、生憎鰻割きが用達しに出かけまして

○「用達しに出かけたッてお前が割けるだらう

主「それは割けない事もございません

○「それじやア焼て貰い度エが

主「ヘエ、何しろ貴下、此の塗盆地の中に鰻がゾロ／＼揃つて居りますが、今日々の鰻は皆達者なもののばかりでございます

(三升亭小勝『小勝落語集』『鰻屋』、大正四)

「鰻屋」では、鰻を調理する「鰻割き」が出かけてしまったことが騒動の発端となる。客は鰻を捕まえることができず、主人のほうはなんとか鰻を捕まえるものの、鰻があまりにぬるぬると手から抜けようとするので、それを握ってしようとする動きに合わせているうちに外へ駆け出して行ってしまう。なおも鰻は暴れまわり、鰻屋の主人は八百屋の車を片付けさせ、とうとう道端に立っている郵便箱も片付けてほしいと言いはじめる。

この噺は、素人が鰻を捕まえようとするときに手の中でぬるぬると動く鰻を落語家がどのように演じるかという、視覚的な要素が非常に

強い噺となっている。そして、八代目桂文楽や、当代の十代目柳家小三治が演じる「素人鰻」では、「鰻屋」のサゲがそのまま用いられている。

ここで注意しなくてはならないのは、初代円遊が高座にかけていた「素人鰻」は、特に後半の部分が、現代において高座にかけられている「素人鰻」と大きく異なる内容だった点であろう。

この噺は、屋敷に出入りしていた鰻割き職人である「神田川の金」を頼りに士族が鰻屋を開業したものの、金は酒癖が悪く、酔うと暴れ出してしまふものである。世話になった主人のためにいったんは酒を断つはずだったが、開業式の夜に祝酒を飲んで暴れ、家を飛び出してしまふ。その後も同じように酒で暴れたため、主人はまた金を追い出してしまふ。そんな中に客が来てしまったので、素人である主人が鰻を捕まえようとするという内容である。したがって、料理をするはずの職人がいなくなってしまうという趣向は、現代において高座にかけられている「素人鰻」だけでなく、「素人洋食」とも共通していることになる。

しかし、円遊が演じた「素人鰻」では、後半の部分が、鰻が捕まえず家の外に飛び出してしまふという内容ではなく、主人がなんとか鰻を捕まえて実際に焼いてみるという噺になっている。けれども鰻は生焼けで骨が数多く残っているだけでなく、塩辛くて食べられたものではない。客たちが女中に不満を言うと、主人は腹を立てて客のところに乗り込んでいくことになる。

主「ナニ食べられないと、怪しからんことをいふ乃公がそれほどにして焼てやつたものが食はれんといふ事はない、職人が焼ても乃公が焼ても同なじ事だ素人だと思つて那の客は軽蔑をするんだらう、乃公が往て見ると旦那が二階に上つて来て

主「貴所方に此の鰻が食べられないといふは何ういふ訳です、同なじ焼方で然うどうも違ふ筈は御座いません

甲「イヤ実は私も此男が然ういうから然んな事はないと威張ったんだが食べて見ると如何にも食はれん、御主人試しに食べて見玉へ

主「ウム……少々是は不味いけれども、食べられない事は御座いません

甲「どうして食ます

主「左様です我慢をすれば食べられませう

〔素人鰻〕、『百花園』第五三号、明治二四・七・五

円遊の「素人鰻」は、鰻を捕まえられない主人を見せる噺ではなく、不味い鰻でも「我慢をすれば食べられませう」と言い張ってしまう士族と、客たちとの会話劇である。

このように、不味い鰻を焼いているにもかかわらず、それを気に留めることもなく偉そうに振る舞ってしまう士族のズレた感覚を揶揄する内容は、明治のはじめの時期であれば通用したものの、大正期以降に演じられた「素人鰻」で伝わるとは思えない。そのため、「鰻屋」の噺と混ざり合っていくことになったと推察される。現在の柳派や古今亭一門が「鰻屋」のことを「素人鰻」と呼称することがあるのも、こうした事情が関わっていると考えるのが妥当であろう。

一方で、素人が不味い料理を作るという要素が「素人汁粉」〔士族の商法〕や、「素人洋食」と共通しているだけでなく、士族である主人が庶民から「軽蔑」されるという要素は、「鰻屋」や現在の「素人鰻」にはなく、円遊の「素人鰻」と「素人洋食」とに共通する要素である。

このように考えた場合、「素人洋食」は、円朝作とされる「素人汁粉」〔士族の商法〕やもともと明治二十年代に演じられていた「素人鰻」と、大正期以降に演じられている「素人鰻」あるいは「鰻屋」も含めた現在の落語の、ちょうど中間点に位置する傍系の噺として演じられていたことがわかる。すなわち円遊の演じた「素人洋食」は、

落語化する「素人洋食」

落語の噺がどのように受け継がれ、作り換えられ、そして後世に残っていたのかという問題について、その明治二十年代における様相を探ることができる、極めて稀有なテキストなのである。

七 おわりに

これまで、山田美妙原作、三遊亭円遊口演の「素人洋食」について、それが口演において原作からどのように作り替えられたのか、その作り替えにおいて、「素人汁粉」〔士族の商法〕や「素人鰻」、「鰻屋」がどのように関わっていたのかを考えてきた。またその中で、明治二十年代において落語の噺が、どのように生成されていたのかという問題を扱った。

「素人洋食」における円遊の役割は、これまでの研究で言われていたような、明治期の新しい文化を噺の中に取り入れたことではない。むしろこれは美妙が行ったことであり、円遊はそうした美妙の原作に対して、落語の世界で語られていた聴衆に馴染みのある要素を次々に付け加えていくことで、落語ともつかなかった美妙の原作を、より落語らしく改変したことにある。江戸期以来の古典落語を明治の文化を取り入れた噺に置き換えていたという、円遊がふだん行っていた口演の手法とは真逆のやり方によって、「素人洋食」を原作から滑稽噺としての落語へと変容させていたのである。

一方で「素人洋食」は、美妙が書いた小説に近い様式が、高座にかけられることで落語へと変容していったという意味で、同時代における落語と小説との関わりにおける一つのあり方を示している。すなわち、この時期の小説と落語との関係は、たとえば坪内雄蔵『小説神髓』（明治一八—一九）の「文体論」などで論じられた「俗文体」と落語の語りとの接続や、単純な影響関係という枠組みで収まる問題ではない。明治期においては落語だけでなく講談も含めて、それらが小説と

落語化する「素人洋食」

どのように関わっていたのか、それぞれの文芸ジャンルが持つ物語様式の差異と共通性や、表現のあり方についての具体的な様相から考えられるべき問題なのである。たとえば夏目漱石が『三四郎』（明治四一）において落語の「宮戸川」を取り入れ、『吾輩は猫である』（明治三八―三九）において「出来心」を取り入れたとき、「素人洋食」が美妙の原作から「落語化」していったのとは逆に、落語が「小説化」していった過程を読み解くことができるはずであり、こうした視点によって日本の近代文学を再考していくことも可能だと思われる。

したがって、これらの文芸ジャンルにおける関係性の問題については、別稿にて具体的なテキストの分析を通じて考えていきたい。

【注】

（1）興津要「素人洋食」、暁峻康隆ほか編『明治大正落語集成』第一巻「演目解説」（講談社、昭和五五年）に所収。

（2）山田有策「解題」、十川信介ほか編『山田美妙集』第二巻（二巻の校訂は山田有策）、臨川書店、平成二四年

（3）注（1）に同じ。